

新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集委員会が選択して紹介いたします。

『TRICK—トリック「朝鮮人虐殺」を なかつたことにしたい人たち』

加藤直樹 著 | ころから、2019、178pp.

自説に都合の良い証拠だけを集めて、科学的な方法論に沿って行われた研究に異を唱えるような本を、広い意味で「トンデモ本」と呼ぶことがある。相対性理論は間違っている、人類はまだ月に降り立っていない、などと主張しているものなどが代表的である。もちろん「常識」となっていることに異を唱えることは悪いことではない。しかし、それを行うのに必要なのは、自説にとって都合の悪い証拠に真摯に向き合うことである。都合の良い証拠だけからなら、どんなことでも主張できてしまう。

本書は、「関東大震災の際に朝鮮人虐殺はなかつた」「実際に朝鮮人は暴動を起こした」といった主張が増えてきていることに危機感を持った著者が、きちんと一次資料を提示しながら（歴史研究なら当然であろうが）、虐殺否定論者の主張や証拠の誤りを正す目的で書かれたものである。ただ、本書で興味深いのは、虐殺否定説が広まるきっかけとなった本はトンデモ本ではなく、「自らも信じてはいない「朝鮮人虐殺はなかつた」という主張を読者に信じさせるために様々なトリックを駆使した“トリック本”」(p. 80)であると述べ、そのトリックを論理的に暴いている点である。人間には自分の考えを補強してくれる証拠に注目する傾向（確証バイアス）があるので、間違えてしまうことは仕方がないとも言えるが、読者を騙す意図を持った本は悪質以外の何物でもない。このような悪書のトリックを見抜くための考え方を学べるという点で、クリティカルシンキング入門書という側面も本書にはあると言える。

評／『彦根論叢』編集委員（令和元年度）／出原健一

『英文解体新書 構造と論理を読み解く英文解釈』

北村一真 著 | 研究社、2019、284pp.

ここ最近、英文を正確に読むことを目指す、英文読解の解説書が新しく出版され、結構な売れ行きを見せている。本書もそのうちの1冊で、出版後何度も重版を繰り返している。日本の英語教育がコミュニケーション重視へとかじ取りされて以降、この種の本は比較的影をひそめるようになっていたが、おそらくニーズはあったのだろう。

英文のレベルは高い。大学生や大学院生はもちろん、高校や大学の英語教員にとっても読みごたえがあるが、説明が非常に分かりやすいので、英語の入試問題が難しい大学の受験生には大いに勉強になるだろう。英文の内容も、いわゆる古典的な文章だけでなく、最近の一般書から映画・漫画まで多岐にわたっており読者を飽きさせない。ほかにも本書の特徴は多々あるが、特に興味深いのは、文法的には破格な（しかし実際にはよく現れる）英文まで一章を設けて解説している点である。まさに生きた英語を正しく理解するための良書と言える。

ちなみに著者は、本学部でも非常勤講師を務めていただいた方である。

評／『彦根論叢』編集委員（令和元年度）／出原健一

